

イタリア語に入った日本語

谷 栄一郎

- I. はじめに
- II. 日本語に入ったイタリア語
- III. イタリア語に入った日本語
- IV. 日本マンガとアニメ
- V. 日本小説の翻訳に見られる日本語
- VI. まとめ

I. はじめに

イタリア人が日本のことを始めて知ったのは13世紀末に書かれたマルコ・ポーロの東方見聞録を通じてであった。ポーロは1274年元の夏の都である上都に到着し、以後17年間も元に滞在し、中国各地を旅行した。この時の体験をもとに当時の中国の様子を詳しく描写している。ついで中国周辺の国々を述べるに際し、ジパング（ZIPANGU）という島に言及している。ZIPANGUという語はジー・パン・ゲーという当時の中国語の音写と考えられ、「日本国」という音を比較的忠実に再現している。ただポーロは日本の事情に通じている者には出会っておらず、見聞録に見える日本の描写には「この国ではいたるところで黄金が見つかるものだから、国人は誰でも莫大な黄金を所有している」といった幻想的なものから「彼らは人肉がどの肉にもましてうまいと考えているのである」といったまったく荒唐無稽なものがほとんどである⁽¹⁾。日本の事情が詳しく伝わるのは16世紀のヨーロッパ人到来に続く、宣教師の報告を待たねばならなかった。イタリア人では三たび巡察師として来日し、布教事業に指導的役割を果たしたバリニャーノ（ALESSANDRO VALIGNANO）が有名である。彼の立案により大友宗麟を始めとする九州のキリシタン大名たちは4人の少年使節をローマに派遣することになった。このいわゆる天正遣欧使節についてのイタリア語史料としてはダニエッロ・バルトリの「イエズス会史」がある。当時のイタリア語の史料に多少の揺れはあるものの、バルトリは日本の名称としてはすでに一貫してGiapponeを使っている。日本の事物の紹介としてはcatana（刀）の紹介がされているのが注目を引く⁽²⁾。もとより、英語が国際語として認められるはるか以前の時代であり、ヘボン式ローマ字など存在しなかったので、当時としてはこれが可能な唯一の表記であった。やがて徳川幕府の鎖国政策により日伊の関係はすっかり絶たれてしまう。鎖国の間も貿易を許され出島にやってくるオランダ人たちにより日本の事情は少しずつヨーロッパに伝わっていたが、日本の詳しい事情がイタリアに伝わるのは1866年に締結された日伊修好条約以後のことである。日伊の交流が活発化するにつれ、音楽用語を中心にかなりのイタリア語が日本語の中に入ってきた。それに引き替え、一般のイタリア人にとっては相変わらず日本ははるか東の遠い国であり、日本の事情は今でもよく知られているとは言えない。イタリア語に入った日本語は少ないが、日伊の文化交流の推移をを反映するものとして興味深いものがある。本稿ではイタリア語辞書をよりどころにこうしたイタリア語に入った日本語を検討してみたい。イタリア語辞書としては定評のあるZingarelli, Vocabolario della Lingua

Italiana,ed.12を基準とするが、この辞書には語の初出年代がのっていないので DISC DIZIONARIO ITALIANO SABATINI COLETT をあわせて併用したい。

II. 日本語に入ったイタリア語

比較のため、日本語にどれほどのイタリア語が入っているか見ておきたい。広辞苑の中から「ローマ」など固有名詞相当語句を除いて、はっきりとイタリア語源としてあるものを探すと次のように167語ある。

ア - カプリチオ【a capriccio イタリア】、ア - カペラ【a cappella イタリア】、アジタート【agitato イタリア】、アダージェット【adagietto イタリア】、アダージュ【adagio イタリア】、アッサイ【assai イタリア】、アツチェランド【accelerando イタリア】、ア - テンポ【a tempo イタリア】、アニマート【animato イタリア】、アリア【aria イタリア】、アルト【alto イタリア】、アルペッジオ【arpeggio イタリア】、アレグレット【allegretto イタリア】、アレグロ【allegro イタリア】、アンダンテ【andante イタリア】、アンダンティーノ【andantino イタリア】、インテルメッツォ【intermezzo イタリア】、インパスト【impasto イタリア】、ヴィオラ【viola イタリア】、ヴェリズモ【verismo イタリア】、エスプレッソ【espresso イタリア】、オーボエ【oboe イタリア】、オーボー、オカリナ【ocarina イタリア】、オブリガート【obbligato イタリア】、オペラ【opera イタリア・op_ra フランス】、オペラ - セリア【opera seria イタリア】、オペラ - ブッフア【opera buffa イタリア】、オペレッタ【operetta イタリア】、オペレット、オラトリオ【oratorio イタリア】、カジノ【casino イタリア】、カストラート【castrato イタリア】、カッサツィオーネ【cassazione イタリア】、カデンツァ【cadenza イタリア】、カプリッチオ【capriccio イタリア】、カンタータ【cantata イタリア】、カンタービレ【cantabile イタリア】、カンツォーネ【canzone イタリア】、カンツォネッタ【canzonetta イタリア】、キアロスクーロ【chiaroscuro イタリア】、コーダ【coda イタリア】、コメディア - デラルテ【commedia dell'arte イタリア】、コロラチュラ【coloratura イタリア】、コロラチュラ - ソプラノ【coloratura soprano イタリア】、【concerto イタリア】、コンチェルト - グロッシ【concerto grosso イタリア】、ゴンドラ【gondola イタリア】、コントラファゴット【contrafagotto イタリア】、コントラルト【contralto イタリア】、コン - モート【con moto イタリア】、サラミ【salami イタリア】、ジョコーソ【giocososo イタリア】、シロッコ【sirocco イタリア】、スケルツォ【scherzo イタリア】、スタッカート【staccato イタリア】、スタンザ【stanza イタリア・イキ`リス】、ズッキーニ【zucchini イタリア】、スパゲッティ【spaghetti イタリア】、スピッカート【spiccato イタリア】、スフマート【sfumato イタリア】、ソ【sol イタリア】、ソステヌート【sostenuto イタリア】、ソナタ【sonata イタリア】、ソナチネ【sonatine イタリア】、ソプラノ【soprano イタリア】、ソロ【solo イタリア】、ダ - カーポ【da capo イタリア】、タランテラ【tarantella イタリア】、チェレスタ【celesta イタリア】、チェロ【cello】、チェンバロ【cembalo イタリア】、チャオ【ciao イタリア】、テアトロ【teatro イタリア】、ディヴェルティメント【divertimento イタリア】、ディミヌエンド【diminuendo イタリア】、ティンパニ【timpani イタリア】、デクレッシェンド【decrecendo イタリア】、テヌート【tenuto イタリア】、テラ - コッタ【terra cotta イタリア】、テラゾー【terazzo イタリア】、テラ - ロッサ【terra rossa イタリア】、テンペラ【tempera イタリア】、テンポ【tempo イタリア】、テンポ - ルバート【tempo rubato イタリア】、ド【do イタリア】、ドゥーチェ【Duce イタリア】、ドゥオモ【duomo イタリア】、トゥッティ【tutti イタリア】、トッカータ【toccata イタリア】、トトカルチョ【totocalcio イタリア】、トラヴィアータ【La Traviata イタリア】、トリエンナーレ【triennale イタリア】、トリオ【trio イタリア】、トルソー【torso イタリア】、トレモロ【tremolo イタリア】、トンド【tondo イタリア】、トンボロ【tombolo イタリア】、ネオ - レアリズモ【neo-realismo イタリア】、ノン - トロッポ【non troppo イタリア】、バジリコ【basilico イタリア】、パスタ【pasta イタリア・Pasta ト`イツ】、パッサカリア【passacaglia イタリア】、バルカローラ【barcarola イタリア】、パルティータ【partita イタリア】、パルメザン

【Parmesan イタリア】、パルランド【parlando イタリア】、バレリーナ【ballerina イタリア】、ピアニッシモ【pianissimo イタリア】、ピアノ【piano イタリア】、ピエタ【Piet_ イタリア】、ビエンナーレ【biennale イタリア】、ビオラ【viola イタリア】、ビオラ-ダ-ガンバ【viola da gamba イタリア】、ビオラ-ダモレ【viola d'amore イタリア】、ピカタ【piccata イタリア】、ピザ【pizza イタリア】、ピッコロ【piccolo イタリア】、ピッチカート【pizzicato イタリア】、ピッツァ【pizza イタリア】、ビブラート【vibrato イタリア】、ファ【fa イタリア】、ファッショ【Fascio イタリア】、ファルセット【falsetto イタリア】、ファンタジア【fantasia イタリア】、ファンファーレ【fanfare イタリア】、フィナーレ【finale イタリア】、フーガ【fuga イタリア】、フェルマータ【fermata イタリア】、フォルテ【forte イタリア】、フォルティッシモ【fortissimo イタリア】、プリマ-ドンナ【prima donna イタリア】、プリマ-バレリーナ【prima ballerina イタリア】、フレスコ【fresco イタリア】、プレスト【presto イタリア】、ベル-カント【bel canto イタリア】、ポルタメント【portamento イタリア】、ボンゴレ【vongole イタリア】、マエストーソ【maestoso イタリア】、マエストロ【maestro イタリア】、マドンナ【Madonna イタリア】、マフィア【mafia イタリア】、マラスキーノ【maraschino イタリア】、ミ【mi イタリア】、メゾ-ソプラノ【mezzo soprano イタリア】、メッツォ【mezzo イタリア】、メッツォ-ソプラノ【mezzo soprano イタリア】、メッツォ-ピアノ【mezzo piano イタリア】、メッツォ-フォルテ【mezzo forte イタリア】、モデラート【moderato イタリア】、ラ【la イタリア】、ラザーニア【lasagna イタリア】、ラルゲット【larghetto イタリア】、ラルゴ【largo イタリア】、ラレンタンド【rallentando イタリア】、リゴレット【rigoletto イタリア】、リゾット【risotto イタリア】、リソルジメント【Risorgimento イタリア】、リタルダンド【ritardando イタリア】、リラ【lira イタリア】、ルバート【rubato イタリア】、レ【re イタリア】、レガート【legato イタリア】、レチタティーヴォ【recitativo イタリア】、レント【lento イタリア】、ロンド【rondo イタリア】

これらの大部分はピアノ、フォルテなど音楽用語である。音楽の分野でのイタリア人の功績はすばらしく、イタリア語の音楽用語は英語を始め、世界中の言語に採用されるに至った。日本語とイタリア語は言語学的にはまったく別系統の言語に属しているにも関わらず、音韻構成が比較的良好に似ているので、一部に英語なまりがあるにせよ、比較的良好にイタリア語原音を写している。例えば、スパゲッティ (spaghetti) という語に見るように、英語、フランス語、ドイツ語にははっきりした促音はないがイタリア語には多数あり、これが日本語のカナで簡単に再現できている。

Ⅲ. イタリア語に入った日本語の初出年代

イタリア語に入った日本語は大部分、英語に入った日本語と共通しているので対照してみた。英語の辞書には研究社大英和辞典 (第5版)、OEDを使用した。

1990年以降 (約8年)	8語
* keirin (競輪) (1992)	(英)
* karaoke (カラオケ) (1992)	(英)
* shinjitsu (心術?) (1991)	(英)
* manga (マンガ) (1991)	(英)
* ninja (忍者) (1991)	(英)
* ninjatsu (忍術) (1991)	(英)
* surimi (すり身) (1991)	(英)
* sushi (寿司) (1990)	(英) sushi (1893)

戦後から1990年まで (45年)

- * sayonara (さよなら) (1989)
- * iaido (居合道) (1988)
- * yakusa (やくざ) (1985)
- * karateka (空手家) (1978)
- * shiatsu (指圧) (1976)
- * origami (折り紙) (1974)
- * aikido (合気道) (1970)
- * bonsai (盆栽) (1969)
- * ikebana (生け花) (1963)
- * judoka (柔道家) (1963)
- * judogi (柔道着) (1963)
- * karate (空手) (1962)
- * tsunami (津波) (1961)
- * shogun (将軍) (1960)
- * no (能) (1958)
- * takigoto (1957)
- * kabuki (歌舞伎) (1957)
- * iamatologo (日本語学者) (1956)
- * kendo (剣道) (1950)
- * banzai (万歳) (1950)

20語

- (英) sayonara (1875)
- (英)
- (英) yakuza (yakusa) (1964)
- (英) cf. karateist
- (英) shiatsu (1967)
- (英) origami (1922)
- (英)
- (英) bonsai (1950)
- (英) ikebana (1900)
- (英) judoka (1952) ,judoist (1950)
- (英) judogi (1954)
- (英) karate (1955)
- (英) tsunami (1904)
- (英) shogun (1615)
- (英) No (1871)
- (英) koto?
- (英) Kabuki (1899)
- (英) cf. Japanologist (1881)
- (英) kendo (1921)
- (英) banzai (1893)

日伊修好条約から終戦まで (約80年)

- * kamikaze (神風) (1944)
- * edochiano (江戸っ子) (1942)
- * sodoku (鼠毒) (1936)
- * iamatologia (日本学) (1935)
- * judo (柔道) (1935)
- * sumo (相撲) (1934)
- * tenno (天皇) (1933)
- * tatami (畳) (1933)
- * kakemono (掛け物) (1933)
- * harakiri (腹切り) (1931, 1889)
- * zen (禅) (1929)
- * haiku (俳句) (1923)
- * chimono (着物) (1918, sec. XVIII)
- * jujitsu (柔術) (1908)
- * yen (円) (1905)
- * scintoismo (神道) (1905)
- * soia (大豆) (1895)
- * samurai (侍) (1895)
- * obi (帯) (1894)
- * daimio (大名) (1889)
- * geisha (芸者) (1884)

21語

- (英) kamikaze (1896?)
- (英)
- (英) sodoku (=rat-bite fever) (1926)
- (英) cf. Japanology
- (英) judo (1889)
- (英) sumo (1880)
- (英)
- (英) tatami (1614)
- (英) kakemono (1890)
- (英) harakiri (1856)
- (英) Zen (1902)
- (英) haiku (1902)
- (英) kimono (1886)
- (英) jujitsu (jujutsu) (1875)
- (英) yen (1875)
- (英) Sintoist (1727) ,Sintoism (1857)
- (英) soy,soya (<Du.soja) (1679)
- (英) samurai (1874)
- (英) obi (1878)
- (英) daimyo
- (英) geisha (1887)

日伊修好条約以前（ザビエル来日から約300年） 5語

- * cachi (柿) (1836) (英) kaki (1727) = Japanese persimmon
- * mikado (御門) (1834) (英) Mikado (1727)
- * sake (酒) (sec. XVIII) (英) sake, saké, saki (1687)
- * catana (刀) (sec. XVII) (英) katana (1613)

日本語の語形が歪曲され一部同定できない語もあるが、初期の流入は極めて緩慢であったのが、時代が下るにつけ流入量は増し、ここ数年の借用語はまだ確定してはいないもののこの1990年代というのは飛躍的に日本語が入ってきていることがうかがえる。

意味についてはほぼそれぞれ日本の原語の意味に対応しているが、中にはずれてきているものも散見する。たとえば、tatami (畳) などは本来日本の風俗として紹介されたはずであるが、Zingarelli には次のように説明されている

- * Nel judo, superficie su cui si svolgono allenamenti e gare.

「柔道の練習あるいは試合が行われる下の面」

DeAGOSTINI を引くともっと明瞭に次のように定義されている。

materassino su cui si allenano coloro che praticano judo 「柔道を行うものが練習を行うマット」

すなわち、日本の住居の畳ではなく、柔道のマットに限定されて認識されていることがわかる。

イタリア語形と英語形を比較してみると、形がはっきり異なるものと、スペルの問題に帰するものがある。

(1) 普通、英語では別の表現をするもの

- edochiano (江戸っ子) (1942) (英) 相当語なし
- iamatologo (日本学者) (英) Japanologist
- iamatologia (日本学) (1935) (英) Japanology
- judoka (柔道家) (英) judoist
- judoistico (柔道の) (英) judo-
- karateka (空手家) (英) karateist
- cachi (kaki) (柿) (英) Japanese persimmon
- nipponico (日本の) (英) Japanese
- tenno (1933) (天皇) (英) emperor

この中で、judoka、karateka は英語でも使われる。英語に kaki という語もいったんは入っているが普通は persimmon が使われるのはアメリカでアメリカガキがすでに知られていたからであろう。イタリアには柿の種類は知られていなかった。「日本」の別称である「大和」Yamato から iamatologo、iamatologia という語が作られるようになったのはフランス語、ドイツ語にも見られないことで注目値する。tenno (天皇) も imperatore (皇帝) という言葉があるのにわざわざ日本語を使うようになったのはこの30年代というファッション下のイタリアと日本の関係の緊密化を示しているのかもしれない。edochiano は edokko (江戸っ子) を形容詞にしたもの。judoistico という形容詞も judo からイタリア語的形容詞を作ったもの。「日本の」にあたる形容詞は giapponese で、これは英語の Japanese にあたり、普通に使われるが、nippon (日本) から作った形容詞 nipponico が今日でも頻繁に使われるのは面白い。OED には nipponese という語も載っているが、実際のところ、この形はほとんど使われない。すなわち、英語では形容詞は一通りしかないのに対し、イタリア語では2通りの表現から自由に選べるのである。英語と日本語を較べると、イタリア語の方が名詞、それも固有名詞を含めて簡単に派生形容詞が作りやすいと言える。

(2) イタリア語と英語でスペルが少し異なるもの

catana (刀)	(英) katana
chimono (着物)	(英) kimono
daimio (大名)	(英) daimyo
risciò (人力車)	(英) rickshaw
scintoismo (神道)	(英) shintoism
soia (大豆)	(英) soy
yakusa (やくざ)	(英) yakuza

英語やフランス語と異なりイタリア語は発音とスペルを一致させようという傾向が非常に強い。母音 a, o, u の前の k 音には c を、母音 i, e の前の k 音には ch を使うことになっているので、kanata、kimono より catana、chimono の方が好まれる傾向がある。y も i と発音が同じなので i の方が好まれ、daimyo は daimio となった。sh の音も普通は sc を使って表記するので、shintoismo より scintoismo の方が好まれるようである。risciò は他に ricsiò、ricsciò、ricsò などのスペルもあるがこれは英語の rikshaw から来たものとの説明がある。s の前の k 音が消えやすいというイタリア語の音韻の特徴がよく現れている。yakusa (やくざ) については英語と同じように yakuza というスペルもあるが、これは母音間の s は濁るという傾向が近年いっそう強くなってきていることの反映ではないかと思われる。母音間に挟まれた s は濁るときと濁らないときがあったのであるが、最近濁ることが圧倒的に多くなってきた。たとえば、小学館の伊和辞典をはじめ casa の s は清音であると注記されているにもかかわらず実際は濁って発音されることが多い。これは本来、北イタリアの発音とされてきたが、近年ミラノの文化的地位が強くなり、テレビ、ラジオなどを通じて全国にこの発音が浸透してきたからであろう⁽³⁾。

(3) 子供用辞書に載っている日本語

大辞典に載っているからと言って、それがそのままイタリア人に理解されるとは限らない。日本語の中でも特によくイタリア人に知られている語にはどのようなものがあるか、イタリアの初級辞書(小中学生を対象とした)3冊について調べてみた。

A : GIUSEPPE PITTANO, IL PRIMO DIZIONARIO DI ITALIANO ILLUSTRATO, DEAGOSTINI, NOVARA 1995

B : DIZIONARIO ILLUSTRATO DELLA LINGUA ITALIANA, EDITRICE PICCOLI, 1994

C : IL PRIMO ZANICHELLI, ZANICHELLI, 1996

cachi (カキ)	A, B, C (caco も併記)
harakiri (腹切り)	B, C
judo (柔道)	A, B, C
kamikaze (神風)	A, B, C
karakiri (=harakiri) (腹切り)	B
karate (空手)	A, B, C
kimono (着物)	B, C (chimono も併記)
sake (酒)	B
samurai (侍)	B
soia (大豆)	A, B, C

こうしてみると、子供が目にし、耳に聞く日本語は以外と少ないように思える。harakiri、kamikaze、kimono、samurai は伝統的日本のイメージである。面白いのは C が cachi (柿) の単数形 caco をあっさり認めてしまっていることである。文法的には問題になるものの、実際には広く使われているからである

う。柔道や空手が入っているのは、こうした競技が今やイタリアの子供にもなじみのあるスポーツになっていることを示している。harakiriの他にkarakiriが載っているのはこの方が古くからイタリア語に取り入れられたことと、今でも多くのイタリア人はhの発音がむずかしく、代わりにkで発音してしまう人が多いからであろう。

(4) 日本語の名詞の性

日本語には文法的性の区別はないが、イタリア語の名詞には男性名詞と女性名詞があり、一般にはかんたんに見分ける方法は存在しない。大体の傾向としては-oに終わる名詞には男性名詞が多く、-aに終わる名詞はほとんどが女性名詞である。日本語から入った名詞はどうなっているか、ZINGARELLIで調べると、女性名詞は次の8語であった。

aucuba (アオキ)、geisha (芸者)、iamatologia (日本学)、katana (刀)、moxa (モグサ)、musmè (娘)、soia (大豆)、yakusa (やくざ)

この中でgeisha、musmè (娘)が女性になることは意味から考えて問題はないであろう。他に-aで終わる名詞にはmanga、sayonara、ikebanaがあるがこれらは無変化男性名詞である。この取り扱いの差について考えてみたい。

aucuba (アオキ)、soia (ダイズ)は植物名である。-aで終わる植物名はラテン語以来女性に決まっているので、それに従ったままであろう。

iamatologiaであるが、やはり-logiaで終わる学問名はラテン語以来女性である。

katanaはイタリア語本来語spada (剣)からの類推が働いているのであろう。

moxa (もぐさ)は日本語のmo-kusaから来ているわけだが、kusa=erba (草)という連想が働き、植物名と見なされたのかもしれない。

yakusa (やくざ)は明らかにmafia (マフィア)に倣ったものであろう。ただし、このyakusaは無変化名詞である。イタリア語らしくないYの文字で始まっているので、外来語という意識が強いのであろう。

子音で終わる外来語が男性名詞になることは確立している。-aで終わる名詞だけ自動的に決まらないが、-aで終わる本来語の類語との連想がつくかどうかで振り分けができていようである。例えば、mangaは本来語fumettoに対応しているので男性として捉えられているのであろう。

(5) ヨーロッパに紹介された日本の植物

日本とヨーロッパでは植生がまったく異なるためプラント・ハンターたちにとっては日本はたいへん魅力ある国であった。日本の植物がよく知られるようになったのは17世紀末に日本に来たドイツ人ケンペルが著した廻国奇観からであるが、さらにチュンベリー、シーボルトの著作により広く知られるようになった。こうした植物は学名のまま各国語に取り入れられることが多い。日本の現地名が学名に取り込まれることはそれほど多くはなかったが、次のようなものがラテン語の学名を通してイタリア語に入っている。

Aucuba (アオキ) a. 1829

[dal giapp. aoki] (日本語アオキより)

Zingarelliの記載は次のようになっている

* Arbusto sempreverde delle Cornacee con foglie lanceolate coriacee e lucenti, punteggiate di bianco e di giallo (Aucuba japonica).

「ミズキ科の常緑灌木、葉は被針形で革質、光沢があり、白と黄の斑が入る (Aucuba japonica)」

この記載によれば、日本の山にふつうに自生するアオキ (斑がない) のことではなく、欧米の庭木としてよく植えられている斑入りアオキに限定されているようである。葉が被針形 (lanceolate) というのも正確ではない。実際は長楕円形。

アオキは1783年日本から帰ったケンペルによって斑入りの種しゆがヨーロッパに紹介され、園芸家の注目を

集めていた樹木である。ケンペルが持ち帰った苗は雌木だけだったため結実せず、1856-66年には雄木を得るためわざわざ日本に採集隊が派遣されたという。アオキは現在イタリアでごく普通に見られる庭木のひとつである。普通のは斑が入っているので、アオキと言えば、「葉に斑が入った観葉木」と思われているのであろう。

なお、Aucuba の語源は日本の方言アオキバから。Kaempfer の日本植物記に Aukuba として正確な特徴記述がされている⁽⁴⁾。もちろん、これは野生のもので斑はない。ケンペルの記載はいわゆるリンネ以前のため植物学上は正式の記載としては認めらず、Thunberg が1784年になって改めて記載し、これに正式の学名 *Aucuba japonica* を与えた。イタリア語、英語などの語形はこれにもとづいている。

cachi (柿) o (pop.) caco, (raro) kaki a. 1836

ケンペルには現地名として Kaki があがっている。cachi のスペルはイタリア語風に書き改めたもの。さらに、cachi の語尾 -i は複数形を感じがするので、日本語としてはおかしい caco なる単数形が作られた。イタリアでは庭木としても比較的によく見られる。果実はスーパーで売られているのをよく目にする。名札は cachi となっているが、他の果物と同様、複数のつもりで書いているのであろう。

ginkgo (イチョウ) a. 1815

[giapp. gin-icho, comp. di gin 'argenteo' e icho 'albero di ginkgo' quindi, propr. 'albero di ginkgo del colore dell'argento']

[日本語のギン-イチョウから、ギン-イチョウはギン(銀)とイチョウ(イチョウの木)の合成語、従って「銀色のイチョウの木」という意味] などというおかしな語源解説がつけられている。

* Pianta di alto fusto delle Ginkgoacee con foglie a ventaglio e frutto a drupa, coltivata come pianta ornamentale (*Ginkgo biloba*) (イチョウ科の高木、葉は扇子形、核果のある実をつけ、鑑賞植物として栽培される。)

イタリアはじめヨーロッパの公園でときどき植栽されている。記載に実が食用となっていないことが目に付く。食用になることはあまり知られていないのであろう。イチョウはケンペルの日本植物記に詳しく紹介され、1730年頃には苗木がヨーロッパに導入されたという。ginkgo の語形であるが、ケンペルの著にすでにそのようになっている⁽⁵⁾。これは銀杏の音読みをドイツ語式ローマ字で綴った ginkjo の j を植字工が g と読み間違えたためであろう。現在のローマ字式に ginkyo がもとのスペルであったという説もあるがドイツ人ケンペルが英語式ローマ字を使ったとは考えにくい。実際、ケンペルはリュウノヒゲを Rjuno Fige、カヤを Kaja と記している。

soia (大豆) a. 1895

[dal giapp. shoyu, di orig. manciù (日本語のショウユから、満州起源)]

この「日本語のショウユから」という説明は無理があるように思える。shoya と soia では発音、スペルとも差があるからである。大豆はケンペルに記載がある。現地名 Daidso となっているがこれは採用されなかった。ケンペルの記載文中に Sooju の製法がかなり詳しく書かれている。すなわち、ケンペルはショウユを Sooju と記載していたのである。のち、リンネが *Dolichos soja* という学名を採用したのはこの Sooju (ソーユ) というスペルから取ったのであろう。フランス語ではこの種小名 soja がそのまま採用された。イタリア語の語形はこの soja をイタリア語風に(イタリア語は j の文字を好まない) i に変えたと考えるのがよいであろう。

その他、camelia (ツバキ)、forsythia (レンギョウ)、nespolo del Giappone (ビワ) などもよく知られているが、これらは和名とは関係がない。camelia (ツバキ) の名称は日本から苗を持ち帰ったイエズス会士 G. J. Kamel (1661-1706) の功績を称えて、リンネがその学名を *Camellia japonica* と名付けたことによる。英語では学名通り l が二つであるが、フランス語、イタリア語では l がひとつになっている。

forsythia も植物学者 Forsyth の名前から来ている。nespolo del Giappone は似た実をつけるヨーロッパ自生の nespolo (西洋カリン) に宛てたもの。どういうわけか、フィレンツェでは庭木として日本のビワがよく植えられている。

IV. 日本マンガとアニメ

Zingarelli には manga の項目はあるが、anime はまだ採用されていない。しかし、すでに広範囲に使われ始めており、このことは日本マンガ、日本アニメのイタリアにおける根強い人気を反映している。日本マンガ、日本アニメは日本語、日本文化の流入に大きく関係していると思われるので、特にこの両語をめぐる問題について論じてみたい。イタリア語にはマンガを指す fumetto という言葉があり、アニメには cartone animato という立派なイタリア語がある。従って、日本マンガは fumetto giapponese、日本アニメは cartone animato giapponese と言って差し支えないが、近年、イタリアでの日本アニメ、日本マンガの流行は manga、anime という語を生んだ。この事情について、イタリア語版「アドルフに告ぐ」の編集者は序文で次のように書いている。「日本人観光客が次から次へと写真を撮っているの見ては笑いを抑えるのに苦しんだ時代はもう過去のことである。日本の経済と技術のモデルが今や我々の社会の指標となっている。その一方で、近年、日本の侵略の最終段階、文化侵略を受けるに至った。心理学者や社会学者が日本アニメ、日本マンガの暴力性を強く非難してきたにもかかわらず、我々の子供たちは大好きなキャラクターの次の冒険をのがすことができなくなっている。イタリアで出版されるどのような日本マンガも驚異的売れ行きになる恐れがあり、マンガ (Manga) とかアニメ (Anime) という言葉は今や日常語彙の中に入ってしまった。」⁽⁶⁾

1976年までイタリア人にとって日本は遠い国であり、日本文化と言え、せいぜい、映画通の人が黒沢明監督の「羅生門」や「七人の侍」を話題にする程度であった。1976年、「アルプスの少女ハイディ」がテレビで放映され、これがイタリアはじめヨーロッパ中でたいへん人気を呼んだ。しかし、イタリアにおける日本アニメ導入に決定的であったのは「UFOロボ・グレンダイザー」というロボット・アニメであったという。これによって日本で数多くのアニメが製作されているという実態が知られるようになり、以後、イタリアのテレビに日本アニメが氾濫するようになる⁽⁷⁾。国営の RAI1, RAI2, RAI3 は比較的日本アニメを流すことは少なくなっているが、民放となると 8 割近くが日本製アニメではないだろうか。イタリアのホームページからひろった日本アニメのランキング10位まで挙げると次のようになる⁽⁸⁾。

- 1) 63 (18.2%) - Ranma 1/2 (らんま1/2)
- 2) 36 (10.4%) - Dragon ball (ドラゴン・ボール)
- 3) 33 (9.5%) - Video Girl Ai (電影少女)
- 4) 31 (8.9%) - Ken il guerriero (北斗の拳)
- 5) 30 (8.6%) - Cara dolce Kyoko (めぞん一刻)
- 6) 29 (8.4%) - Lamù (うる星やつら)
- 7) 21 (6.1%) - E' quasi magia Johnny! (きまぐれオレンジ・ロード)
- 8) 17 (4.9%) - Dott. Slump e Arale (Dr.スランプ アラレちゃん)
- 9) 13 (3.7%) - Conan il ragazzo del futuro (未来少年コナン)
- 10) 12 (3.5%) - Sailor Moon (セーラームーン)
- 12 (3.5%) - Oh mia dea! (ああっ女神さまっ)

その他、無数の日本アニメが現在放映されているが、日本の場合と事情が違うのは新しいアニメと古いアニメがごちゃまぜに放映されていることである。日本であれば、人気アニメは翌年再放送されることはあるが、1年切りで、次から次へと新しいものが放映されているが、イタリアの民放の場合、人気のないものは省かれるにしても、だいたいとしては毎年、同じものが繰り返し放映されている。古いアニメと新しいアニメの取り上げかたには差が見られる。古いアニメを見ると登場人物なども日本名のまま採用され

ているのに、新しいものになるとイタリア語に合うように、イタリア人名あるいはアメリカ人名、フランス人名に変えられているものが多くなる。例えば、「めぞん一刻」などは主人公五代勇作は Godai、管理人の響子は Kyoko、というふうに一応、日本名が使われているが、「オレンジ・ロード」になると主人公の春日恭介は Johnny、ヒロインのまどかは Sabrina というふうにすべてイタリア、欧米の名前に変えられてしまっている。

アニメの場合声をイタリア語に吹き替えれば一応それで済むわけであるが（イタリアでは字幕ものは非常に少ない）、マンガとなると読む方向がまったく逆になっているので日本アニメの人気が出てからも導入には時間がかかった。翻訳の方針にしてもアニメの場合、日本語の表札や手紙を見るシーンなど日本語をそのままにしてあるので、特に登場人物の名前をすべて欧米風に変えてしまっているようなものでは滑稽な感じがするが、マンガの場合はストーリー上重要と思われるようなものは日本語表記の部分もイタリア語に訳していることが多い。登場人物名も最近のアニメのように無理矢理欧米風に変えることはせず、日本名をローマ字（ヘボン式）表記したものを採用している。欧米のマンガは普通の書物と同様に左から右に読むのであるが、版を逆にして使っているためであろう、店の看板などが左右逆になっているものがよくある。ただ、最近のものではまったく日本式にコマを組んであるものが出てきている。これだと画面が左右逆になっているようなことはないが、読むのに混乱する読者のことを考えて詳しい「日本マンガの読み方」を巻末に添えている。

日本マンガ、日本アニメを見ていると日本の文化にも関心をもつ者が多いのであろうか、キオスクで販売されている日本マンガ雑誌や単行本の中には季節の日本の行事やマンガに取り上げられている日本の風習について詳しく解説したものがある。1例を挙げると、1995年4月発行の単行本 Maison Ikkoku10（めぞん一刻）の巻末には4月の日本の行事として HANA MATSURI（花祭り）と MIDORI NO HI（みどりの日）のことが詳しく取り上げられていた。また Japan Magazine という雑誌には毎月日本語コーナーがあり、ローマ字ではあるが次のような日本語が絵入りで紹介されている⁽⁹⁾。mado（窓）、hondana（本棚）、katen（カーテン）、karenda（カレンダー）、sutereo（ステレオ）、beddo（ベッド）、doa（ドア）、kabin（花瓶）、haizara（灰皿）、matchi（マッチ）、hana（花）、raitâ（ライター）、tokei（時計）、terebi（テレビ）、isu（椅子）、nôto（ノート）、taipuraitâ（タイプライター）、hon（本）、enpitsu（鉛筆）、bôrupen（ボールペン）、mannenhitsu（万年筆）。都市のマンガショップではイタリア語版と並んで日本の原書マンガも積まれていた。聞いてみると、熱心なファンになると日本語を勉強して、原書まで読もうとするのだと言う。

大都会には Dojinshi（同人誌）なるものも出現を始めている。イタリア人の日本アニメ、マンガファンが集まって作った同人誌である。注目すべきなのは、このような雑誌でもマンガ、アニメの話題だけでなく、日本の映画、日本の音楽など、アニメとは直接関係のない日本の文化の紹介もされていることである。ミラノで購入した1冊には、日本の伝統音楽の紹介の中で gagaku（雅楽）、yokobue（横笛）、sho（笙）、taiko（太鼓）などが取り上げられていた。

V. 日本小説の翻訳に見られる日本語

イタリアの書店では吉本ばなの小説をよく見かける。1991年 Giorgio Amitrano によって Kitchen のイタリア語訳が出版されて以来、若者を中心にたいへんな人気を呼んでいる。また訳者後書きのなかで shojo manga（少女マンガ）について言及したことが、日本の少女マンガへの関心をかき立てたと言われている。こうした訳書にはたいてい巻末に日本語の語彙解説がついている。KITCHEN イタリア語版では次のようになっている⁽¹⁰⁾。

futon（布団）

tatami（畳）

ramen（ラーメン）

Family Mart（ファミリー・マート）

oden (おでん)
tempura (天ぷら)
tsukimi udon (月見うどん)
tofu (豆腐)
wasabizuke (ワサビ漬け)
nikuman (肉まん)
soba (蕎麦)
tanuki soba (タヌキ蕎麦)
udon (うどん)
yukata (浴衣)
tanzen (丹前)
katsudon (カツ丼)
Danny's (ダニーズ)
okonomiyaki (お好み焼き)
matsuri (祭り)
sashimi (刺身)
kakiagedon (かき揚げ丼)
Mister Donut (ミスター・ドーナツ)

この中には tatami や tofu のように大きな辞書に掲載されているものも含まれるが、大部分の語はイタリアに対応するものがなく、注釈なしでは想像するのがむずかしいからであろう。ファミリー・マートを例にとっても、24時間営業している店などヨーロッパでは想像すら困難なのである。

「祭り」という言葉は欧米にもあるのだが、次のように解説されている。

matsuri: festa popolare in cui vengono eseguite danze, processioni, spettacoli, e i cui partecipanti spesso indossano abiti tradizionali.

「マツリ：民衆の祭りで、踊り、行列、見せ物があり、祭りの参加者はしばしば伝統的な服を着ていく。」すなわち、ヨーロッパの祭りでは見物人は普通の服を着ていくのに対し、日本の伝統的な祭りではよく浴衣などを着ていくところが異なっている点が指摘されている。その他、吉本ばななと並んで村上春樹の小説もよく見かける。「ノルウェーの森」はやはり Giorgio Amitrano によって Tokyo Blues という題をつけられて訳されている。この本の巻末にも「弁当」、「大根」のような日本独特の語彙が解説されている。

VI. まとめ

イタリア語の辞書に記載されている日本語の語彙を検討してみると、発音やスペルだけでなく、語源や意味の記述にはかならずしも正確と言えないものが散見する。とはいえ、近年の日本語の流入には目を見張るものがある。ヴァチカンのカトリックの総本山、日本マンガ、日本アニメは子供の精神の発達に有害であるという意見は今なお頻繁に聞かれるが、テレビにおける日本アニメの洪水は終わりそうにない。全世界的現象であるが、Nintendo、Game Boy、Play Station などのビデオゲームも広まっている。Tamagotchi (たまごっち) のイタリア上陸も伝えられた。フランスなどでは外来語とくに英語の流入に対しては断固としてこれを阻止する方針を崩していないが、イタリアでは日本と同じように外来語に対する排斥の声は大きくない。子供の頃から日本アニメばかりを見て育った子供たちがもう成人になっている。吉本ばななの小説もたいへんな人気を呼んでいる。距離的には日本とイタリアは遠く離れているが、アニメと小説を通して、日本に対する関心はこれからもいっそう深まり、日本語からイタリア語への借用語もいっそう増大していくように思われる。

註

- (1) 愛宕松男訳注マルコ・ポーロ「東方見聞録」平凡社、1988年
イタリア語版としては Marco Polo, *Il Milione*, Roma, 1981を参照。
- (2) Daniello Bartoli, *Dell'Historia della Compagnia di Giesù, il Giappone, Seconda parte dell'Asia*. Roma, 1660
- (3) 郡史郎「はじめてのイタリア語」講談社、1998年,p.158-159
入門書にはめずらしく発音の地域差に詳しい。
- (4) Engbert Kaempfer, *Amoenitatum Exoticarum Fasciculus 5. Plantarum Japonicarum, Nomina & Characteres Sinicos* p.775
- (5) Id. p. 811
- (6) Osamu Tezuka, *La Storia dei tre Adolf*, Milano, 1997, p.262
- (7) 「Japamania日本漫画が世界ですごい!」、たちばな出版、1998年
- (8) <http://www.geocities.com/Tokyo/1552/mangapag.htm>
- (9) *Japan Magazine*, N.11, Milano
- (10) Banana Yoshimoto, *Kitchen*, Milano, 1995, p.147-148

[後記] この小論は、平成9年度奈良県立商科大学の共同研究費の助成を受けて、「地中海地域研究」のために書かれたものの一部である。